

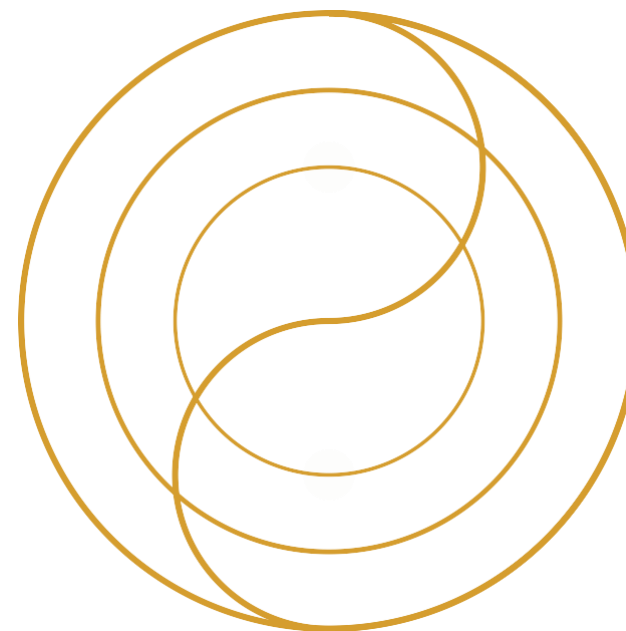


自生的近代性の哲学的方法論としての相関的思惟

Correlative Thought as Philosophical Methodology

目次

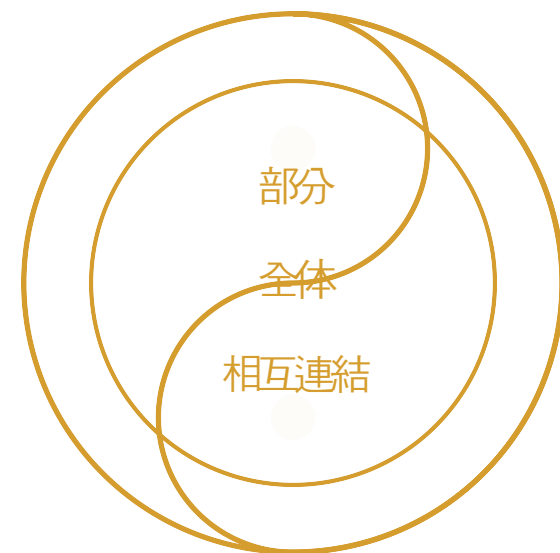
- 1 相関的思惟の概念と定義
- 2 西洋の分析的思惟との比較
- 3 相関的思惟理論の発展史
- 4 ヘンダーソンの4区
分
- 5 認知心理学的実証
- 6 東洋的世界観と伝統
- 7 孔子の一以貫之と共感
- 8 西洋啓蒙主義と経験論に及ぼした影響
- 9 ポストモダニズムとの関
連
- 10 結論および
意義



相関的思惟の概念と定義

「相関的思惟(相関的思惟, correlative thinking)とは、部分と全体が同時に動くという思惟方式である。」

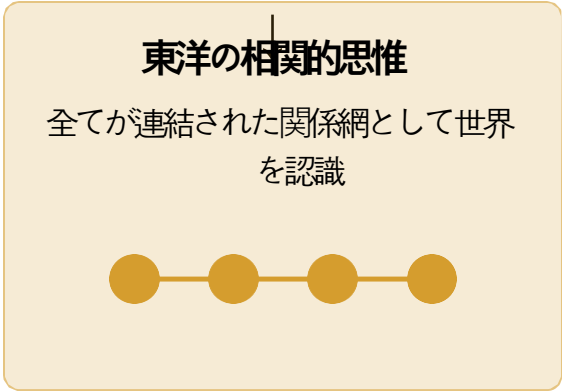
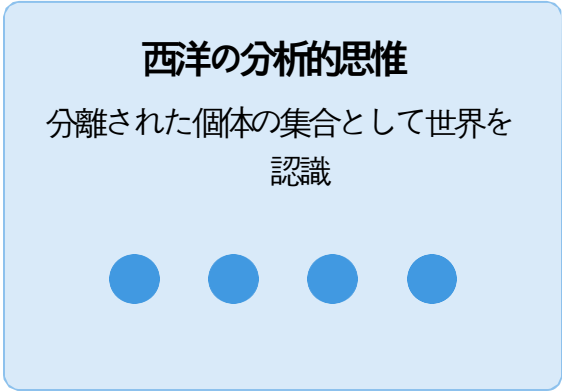
- 部分の中に全体があり万物が互いに相関関係にあるという認識体系
- 西洋を除く大部分の文明はこのような思惟体系を持つ
- 過去には迷信的思考と見なされたが、現代科学により検証されつつ、新たな科学としての可能性が再評価される
- 陰陽理論は代表的な相関的思惟体系として注目されている



西洋の分析的思惟と東洋の相関的思惟の比較

- 分析的思惟万物は独立して動き、粒子(原子分子量子)へ分割できるという西洋の思惟方式
- 相関的思惟万物は互いに連結され分割できず、相関関係として認識する東洋の生成論的思惟方式
- 西洋教育を受けた現代の東洋人も大部分は分析的思惟を採用する

区分	分析的思惟(西洋)	相関的思惟(東洋)
認識論的基盤	個性性、分離性	全体性、連結性
アプローチ方法	分解的・還元主義的	総合的、関係論的
思考方式	線形的、直線的	循環的、関係的



相関的思惟理論の発展史

- 陰陽五行説に対する最初の肯定的評価はグラネ(Grane)から始まる
- グラハム(A. C. Graham, 1919-1991)は構造主義と中国哲学を接合し、東洋の相関的科学性を証明
- エイムズ(Roger T. Ames)、ホール(David L. Hall)、シュワルツ(Benjamin Schwartz)、ニーダム(Joseph Needham)などへ研究が拡張
- 相関的思惟理論は陰陽五行説を最大限客観的に評価し、原始的形態の科学として再解釈
- 西洋はこれを通じて東洋の科学性を理解し始め、東洋は西洋の解釈を通じて自らのアイデンティティを再発見する契機を得た

- 1920-1930年代
マルセル・グラネ 陰陽五行説の初の肯定的評価
- 1950-1970年代
ジョセフ・ニーダム 中国科学技術史研究
- 1970-1990年代
A. C. グレアム 構造主義と中国哲学の接合
- 1990-2000年代
エイムズ、ホール、シュワルツ 相関的思惟の体系化
- 現在
東西洋哲学の統合的アプローチによる研究拡張

ヘンダーソンの4つの相関的思惟分類

John B. Henderson の相関的思惟の分類

体系

1 人間と宇宙の関係

小宇宙(人)と大宇宙(宇宙)の相関関係、人間の身体と宇宙秩序の対応

2 国家アナロジー(ニーダム)

コスモスの領域(天)と地上の領域(王朝/国家官僚体系)の関係、天の秩序が地上政治に反映

3 数秘学的相関体系

五行(五行、金・木・水・火・土)のような数理的・象徴的体系を通じた宇宙現象の説明

4 易経の体系

陰陽の変化法則を通じて宇宙万物の変化を説明する易学(易學)体系



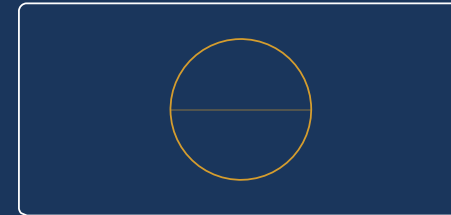
認知心理学的実証

リチャード・ニスベット(Richard E. Nisbett)

「東洋人は相関的思惟によって、世界が西洋人よりも複雑に現れる...実に異なる二つの世界だと言った。」

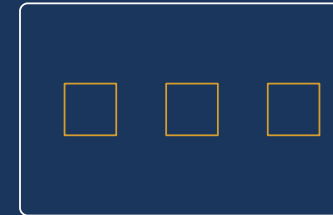
- 東洋人の認知特性: 相関的思惟、脈絡中心、集団的統制の対象
- 西洋人の認知特性: 分析的思惟、客体中心、個人的統制の対象
- 実験結果: 東洋人は背景と関係に注目、西洋人は中心客体に注目
- 国家間の差異はあるが相関的思惟の傾向性は東洋文化圏に共通

東洋的認知



全体的視角
(Holistic View)

西洋的認知

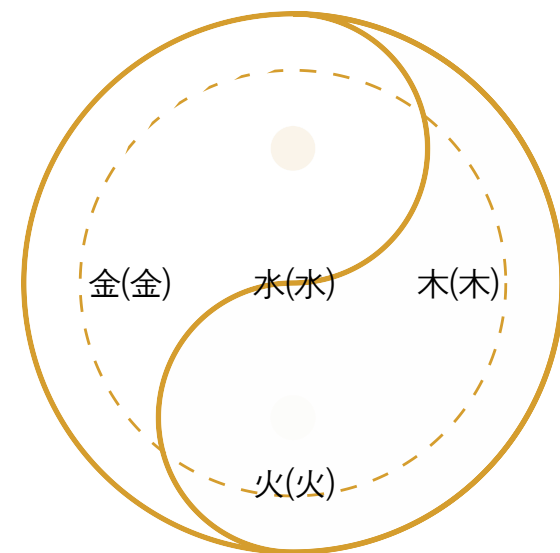


分析的視角
(Analytic V

東洋的世界観と伝統

「相関的思惟は東洋的世界観の共通の認識枠組みであるため、伝統の連続と変化においてその原理が相関的思惟として現れる。」

- 陰陽五行と太極に代表される東洋的思惟は、伝統の連続と変化を説明
- 東洋文化における伝統と変化は、陰陽五行と太極概念にどれほど符合するかで評価される
- 東学思想と大巡思想に現れる伝統と連続の変化もまた、陰陽五行と太極概念で解釈可能
- 東洋哲学における陰陽と五行の原理は、宇宙と人間世界を統合的に説明する基本体系

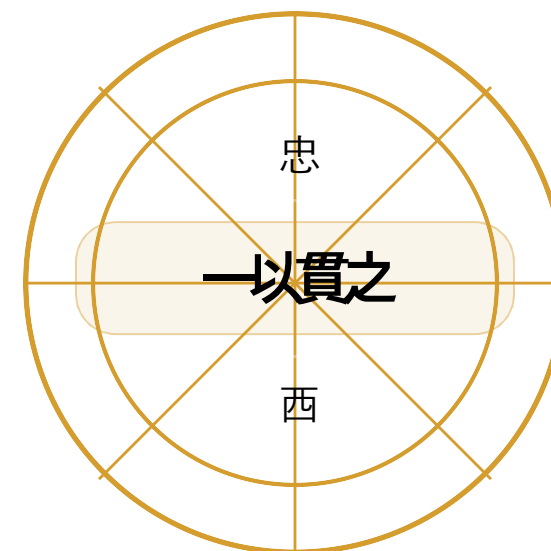


土(土)

孔子の一以貫之と共感

「孔子は自らの理論を忠恕忠恕という共感概念により一以貫之一以貫之した。」

- 一以貫之(一以貫之):一つに貫く一貫性のある原理体系
- 忠恕(忠恕):互いへの誠実と理解 共感の核心概念
- 述而不作(述而不作)創造ではなく古代から伝わる伝統の継承
- 東洋は西洋より内面的一貫性に執着し、共感の一以貫之により東洋思想が客観的一貫性を獲得
- 天地人が互いに共感することを「感応」と表現し、共感后感応の延長線上にある

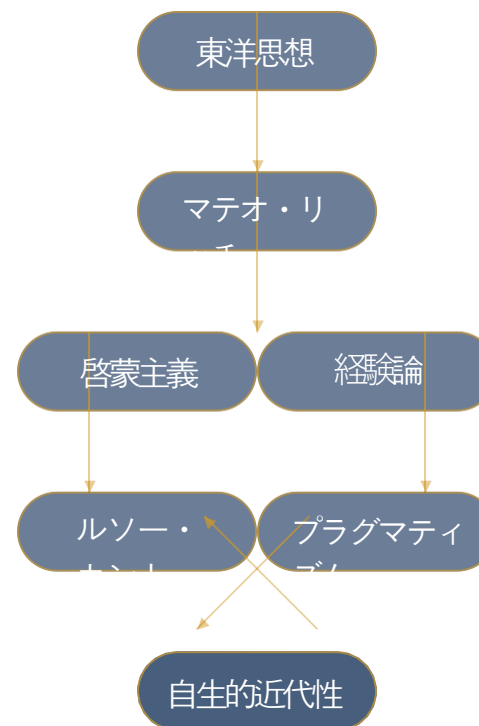


「わが道は一以て之を貫く」
-論語、衛霊公篇

西洋啓蒙主義と経験論に及ぼした影響

「啓蒙主義は西洋にとっては異質な思想であり、西洋は啓蒙主義の異質性を神を代替する道徳の基礎としてよく発展させ、近代文明を成し得た。」

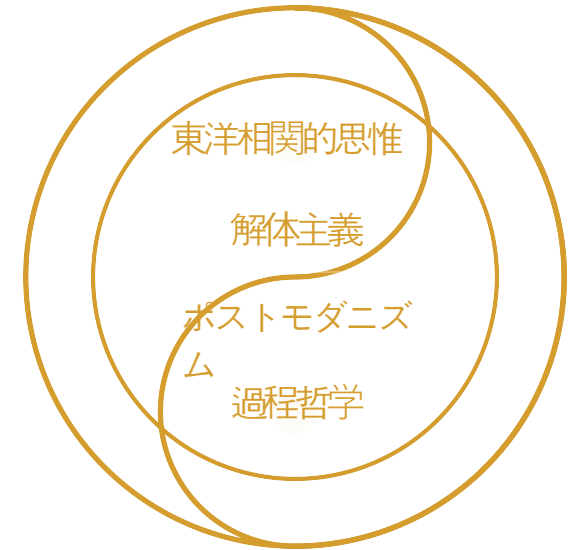
- ジュリアン:孟子と啓蒙哲学者たちの内在性理論、共感の共通点を発見
- ルソー:西洋哲学で見出しがたい東洋の内在性である共感を導入
- 英国経験論:マテオ・リッチの儒教翻訳物を通じた東洋思想の受容
- 進化論と進化人類学へ発展、脳科学のミラーニューロン理論と結合
- デューイのプラグマティズム:孔子思想との類似性、中国に大きな影響



ポストモダニズムとの関連

「東洋の相関的思惟は現代ポストモダニズム哲学と深い関連性を持ち、これを通じて新たな哲学的対話が開かれつつある。」

- 金炯孝: 甌山思想とポストモダニズムの連携、デリダ・老荘の読法研究
- 朴貞珍: 宗教学的観点から哲学の贈与、贈与の哲学の研究
- 朴容淑: 文明史的観点から古代シャーマニズムの東西会通の研究
- 大巡思想研究: ヘーゲル、ハイデガー、デリダ、ドゥルーズとの比較研究を通じた東西哲学の融合可能性の模索



結論および意義

相関的思惟は西洋の分析的思考と異なり、自然と人間、宇宙を総体的に理解する東洋哲学の本質的要素であり、現代科学において再照明される哲学方法論である。

- 相関的思惟東洋哲学の精髓として、万物の相互連結性を認識する独自の認識論
- 自生的近代性西洋近代性と異なり、東洋の内在的価値体系から発現した固有の近代化過程
- 現代的意義生態学、量子物理学、複雑系科学など現代学問において再発見される相互連結的世界観
- 哲学的方法論東西洋の哲学的統合、ポストモダニズムとの接合可能性の拡張
- 未来展望相関的思惟を通じた東西洋哲学統合の可能性と新たな学問パラダイムの構築

